

2015年10月27日

南海トラフ巨大地震や緊急地震速報について理解を深める講演会「11・5津波防災の日
プレイベント 緊急地震速報講演会」（高知地方気象台など主催）が26日、高知市本町の
県立県民文化ホールで開かれ、自治体や自主防災組織の関係者ら約500人が聞き入った。

内閣府の「南海トラフの巨大地震モデル検討会」で座長を務める阿部勝征・東大名誉教授
は、東日本大震災の教訓を受け、南海トラフ巨大地震では最大級の被害を想定していること
を説明。「緊急地震速報を活用し、事前に対応を決めて訓練をすれば、被害を減らすことが
できる」と強調した。

横田崇・愛知工大教授は、津波は高さ30センチでも命に関わるおそれがあると指摘。地
形によっては山側から回り込んで押し寄せる場合もあると注意を促し、「日頃からどういう
土地にいるのかを把握し、揺れを感じたり、緊急地震速報が出たりした時は身の安全を守る
対応を取って」と呼びかけた。

荒谷博・高知地方気象台長は、緊急地震速報が2007年10月に始まってから、今年9
月末までに全国で計151回の警報が流れたが、西日本では回数が少なく、警報に関する意
識調査でも四国では「どうしたらよいかわからない」と回答した人が多かったことなどを
紹介。「地震の経験が少なく、訓練を重ねることが大事」と述べた。

2015年10月27日 Copyright © The Yomiuri Shimbun

高知)南海トラフ地震「早い避難必要」 専門家が講演

朝日新聞 デジタル版 堀内要明

2015年10月27日 03時00分



講演する阿部勝征・東大名誉教授＝高知市本町4丁目の県立県民文化ホール

Ads by Google [PR]

11月5日の「津波防災の日」を前に、南海トラフ地震や緊急地震速報についての講演会が26日、高知市本町4丁目の県立県民文化ホールであった。高知地方気象台などの主催で、自主防災組織の関係者らが参加した。

内閣府「南海トラフの巨大地震モデル検討会」座長の阿部勝征・東京大学名誉教授は講演で「東日本大震災では、南北450キロ、東西200キロにわたり海底の岩盤がずれ動いた。高知でも近海に同様の構造があると忘れてはならない。来てしまえば逃げられないのが津波。一刻も早い避難が被害を減らす」と訴えた。

荒谷博・高知地方気象台長は、気象庁の緊急地震速報の現状を紹介した。2007年度の導入以来、全国で151回、うち県内では4回の緊急地震速報の警報が発表されたと説明、「東日本大震災の記憶が生々しい東北や関東に比べ、西日本は速報への認知度が低い。避難訓練と組み合わせて活用などに取り組んでいく」と話した。(堀内要明)

